

ウナギ減少の大きな要因は、①海洋環境の変化、②過剰な漁獲、③成育場の環境変化とされています。その中で成育場の喪失が特に問題です。

堰や水門によってウナギの遡上・降下が妨げられるようになり、川の護岸工事でウナギのすみが失われ、用水路工事で田んぼが川と切り離され、田んぼ周辺での成育ができなくなりました。

高度経済成長期以降、日本の河川には河口堰やダム、砂防ダムなど多くの河川横断工作物が建設され、河川の上流と下流、海と川のつながりが失われました。シラスウナギが遡上でき、「クロコ」となって流域全体の河川・湖沼に生息し、成魚となって海に帰れるような水環境が回復されないと、ウナギの再生はありません。

どうしたらウナギが戻ってくるの？

利根川河口堰・常陸川水門の改善を

ウナギの遡上・降下に大きな影響を与えているのが、最下流部にある利根川河口堰と常陸川水門です。

近年、利根川流域の水道

用水・工業用水の需要は減少の一途をたどり、水余りが進んでいます。もともと水資源開発のためにつくられた利根川河口堰や、霞ヶ浦開発の常陸川水門はその役割の見直しが必要となっています。

そのことを踏まえて、ウナギなどの魚類が行き来できるように、これらの施設の構造や運用の改善を求めていきましょう。

利根川河口堰

1971年1月に竣工し、独立行政法人・水資源機構が管理しています。

この河口堰の目的：①塩害防止 ②東京都・埼玉県の水道用水、千葉県の水道・工業・農業用水の開発

霞ヶ浦・常陸川水門

1963年5月に竣工し、国土交通省が管理しています。

この水門の目的：①塩害防止 ②洪水防止 ③霞ヶ浦開発事業(1996年3月竣工)の目的を補完
霞ヶ浦開発事業の目的：湖水位を操作して茨城・千葉県の工業用水、茨城・千葉県・東京都の水道用水、茨城・千葉県の農業用水の開発

利根川流域市民委員会

利根川ではダム建設等の大規模開発事業が次々と行われ、かけがえのない自然が失われてきました。

- ①今なお進行中の大規模開発事業にストップをかける。
- ②過去の開発事業を見直し、かつての利根川の豊かな自然をできるだけ取り戻す。
- ③利根川流域住民の治水安全度を真に高める施策を実現させる。

以上を活動目標として、2006年7月に利根川流域市民委員会が発足しました。

利根川の未来を考えるカムバック・ウナギ・プロジェクト

利根川においてウナギが生息できる環境を取り戻すため、流域住民が改善方法をまとめ、その実施を行政に働きかけていきます。

連絡先

利根川流域市民委員会事務局

深澤洋子 電話& FAX 042-341-7524 080-5372-4084 E-mail bbjaga@jcom.home.ne.jp

利根川をウナギがすみやすい川にしよう！

ニホンウナギは絶滅危惧種です

利根川には、上流部に数多くのダムがあり、中流部には取水堰、下流部には河口堰などがあり、ウナギ、アユ、サケなどのさまざまな水生生物の生息に大きな影響を与えています。

鰻

ウナギの一種、ニホンウナギ(学名 *Anguilla japonica*) は現在、急激に減少しています。

日本のウナギの漁獲量は1960年代には年間3000トン前後ありましたが、2015年にはわずか70トンにまで減少しました。2013年に環境省がニホンウナギを絶滅危惧種に指定し、2014年にはIUCN(国際自然保護連合)が絶滅危惧種に指定しました。



矢木沢ダム(上流部)

出典：(独)水資源機構のHP



利根大堰(中流部)

出典：(独)水資源機構のHP



利根川河口堰と常陸川水門

出典：国土交通省のHP

【利根川】

利根川は、流域面積16,840km²、全長322kmの日本最大級の河川です。その源は群馬県みなかみ町の大水上山(標高1,831m)で、関東1都5県の流域の水を集めて千葉県銚子市において太平洋に注ぎます。

河口から18.5km上流に建設された河口堰や常陸川水門によって川と海のつながりが分断されています。

【利根川河口堰、常陸川水門(霞ヶ浦の出口)】

これらの堰・水門には魚道が設置されていますが、その幅は数mのごく狭いものですので、魚道だけでは魚類は十分に上り下りを行うことができません。

魚類が行き来できるように堰・水門のゲートの操作などを見直す必要があります。とりわけ、常陸川水門はゲートの閉鎖時間が非常に長く、川と海を分断しています。

上の航空写真では見えないほどの狭い部分が魚道(赤色四角枠内)です。

どうなっているの 利根川とウナギ

全国のウナギ漁獲量は大きく減っていますが、とりわけ利根川水系の減り方は顕著で、下図のように坂道を駆け落ちるように激減しています。

利根川水系のウナギ漁獲量は、1960年代は年間1000トンを超えることもありましたが、1970年代に入ると減りはじめ、その後は減少の一途をたどるようになりました。1980年は500トン、1990年は200トン、2000年は100トン、2010年は40トンになり、その後も減り続け、2015年は原発事故後の放射能汚染による下流域での出荷制限もあって（2016年に一部解除）、わずか3トンになっています。

なお、ウナギ漁獲量の減少は、ウナギ漁業者が減ってきたことも一因とされています。▲大水上山

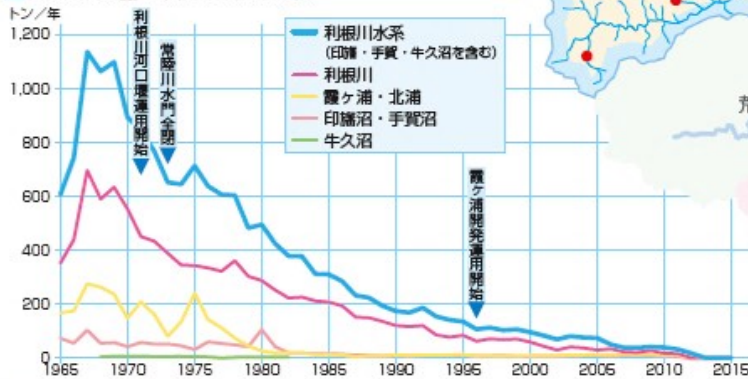
流域住民アンケート結果から●

- 子どもの頃、竹ざおにタコ糸をつけ、針の先にドジョウをつけて、夕方岸辺に立ておくと翌朝ウナギがかかって暴れていた。とれればいつでも煮て食べた。（霞ヶ浦・昭和10年代）
- 夏休み中、灌漑用の溜池などで水遊びをしながら、ドジョウ、ザリガニ、シジミ、タニシ、フナ、コイ、大きなカラス貝などが取れ、もちろんウナギも手首くらいあるようなのを捕まったり釣ったりして思う存分遊んだ。採ったウナギはタイで焼いて数日か飼って、その後、父や兄がさばいて焼いて家族で腹いっぱい食べた。

流域住民アンケート結果から●

- 小学校入学前の夏、兄に夜連れ出され、田んぼの端でドジョウやウナギを「う鉄（ばさみ）」で捕まえた。その時の灯り持ちが私の役目だったが、眠くて足を踏み外し、水の中へドボン。とても辛かった。（群馬県みどり市・昭和10～20年代）
- 八瀬川は幅2～3m、護岸は石垣でできていて、石垣の間にウナギが生息していた。川には水草や藻などが群生して、魚の住みかになっていた。子ども3～5人で2か所せき止め、水をかい出して魚獲りをした。（群馬県太田市・昭和30年代以前）

■ウナギ漁獲量の推移（利根川水系）



出典：農林水産省「漁業・養殖業生産統計」

魚など生き物が 上り下りしやすい 利根川にしよう

■利根川水系のシラスウナギ漁業

利根川・霞ヶ浦のウナギは、冬から春にかけてシラスウナギ（ウナギの稚魚）として海から川や湖沼に入り、体色が黒っぽいクロコとよばれるウナギに成長します。さらに黄ウナギ、銀ウナギと姿を変えて成長したあと、グアム島近くの海域で産卵するために海に下ります。

養殖のためのシラスウナギ漁は12月から翌年4月にかけて河口域で行われています。かつて利根川・霞ヶ浦でのシラスウナギ漁獲量は日本一で、全国漁獲量に占める割合は1960年代では3分の1、1970年代では2分の1もありました。

利根川水系はニホンウナギにとって極めて重要な水域です。



シラスウナギ

流域住民アンケート結果から●

- 小学生の頃、利根川が増水した後、水が引いたため池にウナギがいて、それを川魚屋に売って、その金でせんべいを買って食べた。（茨城県取手市・昭和20年代）
- ウナギは大雨の時、川からのぼってどんな山奥の沼や池にも入ると年寄りが話してくれた。同じように大水の時、今度ほ下っていくそうだ。（埼玉県本庄市）

ダムや河口堰があると困るのは、ウナギだけではないよ。アユやサケ、サクラマスも川と海を行き来して生活するんだ。

